

実名著作と偽名著作はコインの両面

キルケゴールは多くの場合、実名著作と偽名著作を同時に刊行している。彼は、右手で信仰的著作を差し出し、左手で非信仰的著作を差し出したが、読者は偽名著作のほうばかりを受けとった、しかし偽名著作には自分の意見は一つも含まれていないと述べている。偽名著作の作者はあくまでその偽名著作者だというのが、キルケゴールの言い分なのである。実名著作にせよ、偽名著作にせよ、その背後には、生身の人間である「セーアン・キャケゴアー」が存在するが、彼は決して知られることがないだろう（前号参照）。

そこで、我々も作家キルケゴールのことだけを考えることにしたい。仮に偽名著作が彼の著作活動の裏面だとすれば、実名著作はその表面に当たる。しかし、表裏一体という言葉があるように、両者はキルケゴールの著作の持つコインの両面であり、それ自体が一種の弁証法的構造を有している。コインの表裏を分かち鍵はキリスト教の信仰である。偽名著作は、美的あるいは広く哲学的な内容を示しつつ、「間接伝達」の方法でキリスト教の信仰を志向している。これに対して、実名著作は「直接伝達」の形式で信仰を語り、一連の「建徳的講話 opbyggelige Taler」という名称で知られているものである（「建徳的講話」は倫理道徳的なニュアンスが濃いので、「信仰建て直し講話」と訳したほうが良い）。

いずれにしても、キリスト教というものが潜在的にも（偽名著作）、顕在的にも（実名著作）大きなポイントになることには違いない。ではここで問う。キリスト教が分かればキルケゴールが分かるのか。この問い方には、クリスチャンでなければキルケゴールは分からないものだという含意がある。それでは、キリスト教人口わずか1%の日本で、百年以上にわたりキルケゴールが読まれてきたのはなぜなのか。キルケゴール研究者や愛読者の少なからずはクリスチャンであるが、そうでない人々のほうがはるかに多いだろう。

日本におけるキルケゴール受容

ここで、日本におけるキルケゴール受容の歴史をごく簡単に振り返っておきたい。⁽¹⁾すでに1906年(明治39年)に、キルケゴールが続けざまに紹介ないし論評されている。内村鑑三はこの年の『聖書之研究』6月号の「大野心」の中で「思想家キルケガート」についての所感を述べている。また同年の『早稲田文学』7月号では、上田敏が「イブセン」論の中で、「哲学者キエルケゴールド」の「あれかこれか」とイブセンの「一切か無か」との関連を論じ、同誌9月号では、金子筑水が「キヤーケゴールドの人生観」を書いている。内村鑑三はキルケゴールの無教会主義的姿勢に感銘を受けたようで、1914年(大正3年)には「刹那」(「瞬間」)の抄訳(石川鉄雄訳)を『聖書之研究』に連載した。宗教的関心を有する内村に対して、上田敏や金子筑水はそれぞれ文学的、哲学的なキルケゴール受容と言えるかもしれない。

1915年(大正4年)、和辻哲郎は大著『ゼエレン・キエルケゴール』を刊行した。この著作は世界的に見ても最も早いキルケゴールの総合的専門研究である。キリスト教的関心からキルケゴールに再び注目が集まったのは、第1次大戦後からである。この時期、カール・バルトの危機神学(弁証法神学)が登場し、

日本でも神学の領域においてバルト経由でキルケゴールが着目された。1935年(昭和10年)には、三木清監修による『キエルケゴール選集』全3巻が改造社から刊行された。第2次大戦後は実存主義ブームに乗ってキルケゴールが読まれるようになり、今日に至るまで宗教的、哲学的、文学的、心理学的、時代批判的と、実に多様なアプローチがなされてきた。

受容の初期の段階において、キルケゴールの表記がキルケガート、キエルケゴールド、キヤーケゴールド、キエルケゴール、キエルケゴールと一定しなかったように、彼の著作は日本では当初からさまざまな観点から着目されてきたと言ってよいのかもしれない。作家キルケゴールは、我々に対して多様な顔を見せてきたのである。

反転する表裏の弁証法

キルケゴールとは何者なのか? 生前、彼は必ずしも理解されていたわけではなかった。とくに晩年の「教会闘争」の影響もあり、彼は「教会の嵐」と見なされていた。死後もしばらくは忘れられた存在でもあった。キルケゴールを新たに見出し、彼の思想に光を当てて広く世界で紹介したのは、ゲオーウ・ブランデス Georg Brandes (1842-1927) である。ブランデスは、ユダヤ系の文芸評論家として知られ、自由主義的で無神論的な思想家であると評された人物でもある。彼はニーチェとも交流があり、ニーチェにキルケゴールを読むように勧めたのもブランデスであった。

それゆえ、キリスト教が分かればキルケゴールが分かるというわけではない。そんな単純な問題ではないのだ。何よりもキリスト教が国家の公的宗教となり、これが国民の日常生活の隅々までに浸透したキリスト教世界そのものに対して、キルケゴールは新約聖書の説くキリスト教を導入しようとしたことを思い出せばよい(その最後の激烈な戦いが「教会闘争」である)。そういうことを考えてみれば、教会に毎週通い、牧師の説教を素直に受け取る篤実なクリスチャンであればあるほど、キルケゴールが逆に分からなくなるとは言えないだろうか。日本人の場合で言うと、自分はクリスチャン一家の何代目だと誇りに思っているような者ほど、キルケゴールから最も遠い所にいるとは言えないだろうか。

むしろ、信仰に絶望を感じている者のほうが、実はずっとキルケゴールの立場に近い。そもそも、信仰と絶望とはコインの裏表、ポジとネガの関係にある。キルケゴール自身にしても、そのことを自覚していなければ、実名著作と偽名著作を同時に書き続けることはできるはずがなかった。表裏一体とは文字通り、表と裏がきわめて接近していることを意味する。裏は容易に反転して表になるし、表もたちまち逆転して裏となる。そうした反転や逆転は論理ではなく、実存的な飛躍によって起こる。そして、この飛躍こそが、キルケゴールの著作活動における弁証法的二重構造の秘密なのである。

(1) 大谷愛人・柏原啓一「対談・キルケゴールと現代—日本のキルケゴール研究を回顧しつつ」、『理想』1979年8月号「夏季特大号・キルケゴール」、2～36頁、また小川圭治『キルケゴール』(講談社、1979年)参照。